

植民地研究の展開と「文化」研究

松田 京子

本稿は、一九九〇年代以降の日本の植民地研究の展開を、広義の思想史、もしくは思想も含んだ広義の「文化」研究との関連で論じていく。ただし植民地研究の網羅的な整理を行うことは、主に筆者の力量という点から難しかったことを、率直に述べておかなければならない¹。本稿は、筆者の観点からみて特徴的だと思われる研究潮流を概観することに内容が限定されており、主に注記として紹介する個別の研究成果についても最小限のものであることを明記しておく²。また「帝国」日本の政治的な支配が及んだ地域は広範囲にわたっており、本来ならば日本の植民地研究の研究史は、例えば植民地朝鮮をめぐっては少なくとも韓国での研究動向、樺太をめぐっては少なくともロシアでの研究動向を十分踏まえ、それ

との関連でまとめられるべきだと思われるが、すべての地域を対象として、そのような考察を行うことは、個人的な営為としては限界を感じざるを得なかった³。そこで具体的な地域としては、特に植民地期の台湾および戦後の台湾をめぐる研究動向を中心に論じていきたい。

一、国民国家論・ポストコロニアル理論と植民地研究

一九九〇年代の日本近代史研究の特徴を挙げるとすれば、その一つとして国民国家論の台頭を指摘することができる⁴。西川長夫の問題提起を起爆剤として、明治以降の日本の国家・社会体制を、国民国家として問い直そうとする研究が多数、出現した⁴。そしてそのような

研究動向と軌を一にしながら、国民国家形成とほぼ同時に、日本が「帝国」としての側面をもったことについての問いが深化し、植民地研究が質・量ともに飛躍的に充実した点を二つ目の特徴として指摘しておきたい。このような植民地研究の展開を、駒込武は二〇〇〇年の段階で、植民地研究から「帝国史」研究への重点の移行とし、その特徴を次の四点としての確にまとめている。

第一に、日本と朝鮮、あるいは日本と台湾という二項間の関係にとどまらず、複数の植民地・占領地と日本内地の状況の構造連関を横断的に捉えようとする^⑤こと、第二に内地の状況が植民地支配を規定した側面のみならず、植民地の状況が内地に与えたインパクトを解明すること、第三に従来の経済史を中心とした帝国主義史研究の成果をふまえながらも、政治史や文化史（あるいは、政治史としての文化史）の領域を重視すること、第四に「日本人」「日本語」「日本文化」というカテゴリーを自明なものともみならず、その形成と変容の歴史的プロセスに着目すること……

ここで、特に思想史研究との関連でいえば、駒込が指摘した第三、第四の特徴、すなわち、それまで自明視されがちであった分析枠組自体の検討も含む形で、広義の

意味で「文化」を対象化した研究が盛んとなった背景について、さらに説明が必要であろう。

エドワード・W・サイードの著書『オリエンタリズム』^⑥は、一八世紀末以降の「世界史」の展開の中で、「西洋」を自認する主体が、「東洋」を自らから切り離し、「東洋」に対して政治的・経済的・軍事的な支配を行うだけでなく、いかに「東洋」を自らの認識枠組の中に回収していくのかを詳細に論じた。ミシェル・フーコーの「言説」概念を用い、このような知的支配のあり方を「オリエンタリズム」と名付け、とりわけ「学知」の権力性を鋭く論じたサイードの議論は、日本においても「異文化研究」に携わる学問分野に大きな衝撃を与えた。植民地研究も、その例外ではない。その後、サイードの議論は、「重なりあう経験」すなわち植民者と被植民者の「文化領域における相互依存関係」^⑦に対する注目を促しつつ、文化と帝国主義の関連性の解明へと展開していったが、このようなサイードの議論をはじめとするポストコロニアリズム理論は、一九九〇年代以降の植民地研究に深い影響を与え、例えば植民地支配に「学問」がどのように関連したのかといった「学知」と植民地主義の関連性を問う研究の活性化につながったといえよう。^⑧

二、「植民地近代」論と「文化」への関心

さらに植民地研究の中で、広義の「文化」に関する関心は、日本ではとりわけ二〇〇〇年代になって、「植民地近代」という問題提起との関連で、一層、研ぎ澄まされていった。「植民地近代」の議論は、まずは韓国国内での研究状況に対して問題提起され、それを受けた日本の朝鮮史研究の分野で大きな関心を呼んだ。「植民地近代」をめぐる研究動向については、すでに優れた紹介論文が複数、刊行されている。⁹そこでここでは、その一つである松本武祝の論に依拠し、簡単に概観しておきたい。

一九九〇年代後半に、韓国の論壇で注目されるようになった「植民地近代」論の特徴として、松本は次の三点を指摘している。¹⁰①一九九〇年代前半の「植民地近代化論」と「収奪論」の間での論争は、実は両者とも「近代化」と「民族主義」という認識基盤を共有しつつ展開されたものであるとし、その状況に対する問題意識とともに登場した「植民地近代」論は、「近代」そのものを批判的に捉えた上で、「近代」という点で植民地期と解放後の連続性を重視する点。②日常生活の中の権力作用を重視し、その分析概念として「ヘゲモニー」「規律権力」

「ジェンダー」などが活用される点。^③それまで「つねに評価基準として共有されてきた民族主義を、相対化」しようとする点。

つまり、ポストモダンリズムの思潮の中で、近代的な価値そのものが批判的考察の対象となり、その中で被植民者の「主体」のあり方について、日常生活の中で何重にも張り巡らされていく「微視的権力」¹²との関連で考察しようとする研究動向だといえる。このように植民地における権力関係を、より広汎に捉えようとする動きと連動して、植民地における「抵抗」の可能性をより広い文脈の中で捉えようとする研究も登場した。

尹海東は、植民地において、支配権力と「植民地民」の関係性を論じる際、従来の「親日」概念から「協力」概念への転換の必要性を訴える。その上で、「協力が構造化し日常化する」状況は、裏返してみれば、「多様な形式の抵抗が構造化し日常化するということを意味する」とし、¹⁴このような「抵抗」と「協力」が交わる地点に「政治的なるもの」¹⁵すなわち公共領域（「植民地的公共性」）の成立をみる。そしてこのような公共領域はつねに規律権力化する傾向性と、「植民地秩序を維持・強化する権力」に陥りかねない性質をもつことこそを、「植民地近代」の問題として注意を促すのである。¹⁶

ただし「植民地近代」の議論に対しては、厳しい批判も行われている。その代表的な論者である趙景達¹⁷は、被植民者の重層性を重視し、「植民地近代」論が主張する植民地権力のヘゲモニーの成立は、「在地官吏や知識人・企業家・地主・富農・民衆上層」を念頭に論じられており、「知識人と民衆の亀裂を深刻なものとして捉える視座がはなはだ希薄」であると批判する¹⁸。そして「植民地支配の本質」は、「近代性をめぐって多様になされる収奪・差別・抑圧と、それを担保する暴力の体系性こそある」とし、少なくとも「民衆世界」に対しては、「日常的にある暴力の脅威」によって同意調達が確保されていたのであり、「支配的ヘゲモニーの脅威下にあっても相対的に自律的」であったものとして「民衆世界」を位置付け、植民地の近代を語る際に、「植民地の民衆世界」に注視することの重要性を主張している¹⁹。

このように植民地の日常により注目が集まり、その場に働くヘゲモニーや規律権力の解明、さらに植民地支配の根幹に存在する「暴力」への日常的な対応もしくは抵抗の思想的基盤や具体的な行動様式の解明が重要な問題として認識されていく、そのような動向の中で、広範な意味での「文化」への関心が深められたといえる。ここの「文化」とは、思想や認識枠組、行動規範はもち

ろんのこと、習慣的行為や行動様式、さらにはそれらの方々に影響を及ぼしていく教育やメディアなど多岐にわたるものである²⁰。このような形での「文化」への着目について、戸邊秀明は「経済的・政治的な支配―被支配にとどまらない植民地状況を指し示そうとして選ばれた、いわば方法としての文化概念²¹」であると指摘し、植民地における「生きられた近代²²」を具体的に洞察するための戦略的方法として評価している。

三、記憶・日記・「口述歴史」

このような研究の展開の中で、植民地における「生きられた近代」を論じる際の試みとして、個人の日記や「口述歴史」を重視し、それを切り口として多様で具体的な経験の位相に迫ろうとする研究が盛んに行われているのも、近年の大きな特徴だといえよう。ここでは、その状況を特に台湾研究に即して述べていきたい²³。

台湾における日記研究の第一人者である許雪姬は、植民地期の台湾に関する研究を行おうとする際に直面する使用できる資料の多くは植民者が書き残したものという状況の中で、とりわけ被植民者であった台湾人が残した日記の分析を通じて植民地期の諸問題を解明しようと

する試みは、台湾の「歴史解釈権」を奪還する試みである⁽²⁴⁾と述べている。まさに駒込武が指摘する「研究の再生産の過程における、非対称的な関係の存在⁽²⁵⁾」という状況に対して、批判的に介入し打破する方法の一つとして台湾における日記研究の進展があったといえよう。その上で許雪姬は、台湾人以外の人々、例えば官僚などが台湾の状況について描いた日記もまた、「参考⁽²⁶⁾に値するもの」として、その一定の価値を認めている。

日本人の植民地官僚などの日記に関しては、近年、日本国内でも続々と刊行されている。このような動きの代表的なものとして、例えば一九二八年から一九三九年まで台湾総督府の地方官・地方長官を勤めた内海忠司の日記の刊行や、一九一九年から一九二三年まで台湾総督を勤めた田健治郎の日記の刊行⁽²⁷⁾が挙げられるだろう。とりわけ『内海忠司日記』に関しては、日記本文の翻刻の他に「研究編」と題して、内海忠司の日記に関連する複数の研究論文が収録されている。その中で、同著の編者の一人でもある駒込武は、日記から見えてくる内海忠司の台湾経験と、台湾人の植民地経験の懸隔について、次のように述べている。

こうした内海の日記から浮き彫りになるのは、被統治者としての台湾人の経験していた世界と、内海の

経験していた世界との間に存在した巨大な懸隔である。……こうした事態を前にして重要なことは、内海の経験した世界の内側にだけ視点を限定するのではなく、その対極としてたとえば農民組合員として投獄された者たちだけをクローズアップするのもない、両者をつなぐような歴史叙述の模索である。人それぞれにより異なる世界の経験があり、それぞれのリアリティがありながらも、本人が自覚するとならないとにかかわらず、それらの世界はいわば「地続き」⁽²⁸⁾だからである。

植民地在住日本人の植民地での経験と被植民者の植民地経験の懸隔の大きさを見極めつつ、そのあいだをつなぐ模索は、植民地研究にとって重要な課題であり、日記を主要な資料として具体的な経験の位相からこのような課題に迫ろうとする研究は、今後ますます深化していくことが期待される。

このように日記の記述に寄り添った形での歴史研究は、植民地経験の具体像を解き明かす上で大きな可能性を孕むものであるが、ただし安価ではない日記帳や文房具を購入し、それに日記を継続して書く習慣を身に備えた層⁽²⁹⁾というのは、かなり限定されるのもまた事実である。例えば植民地台湾において、圧倒的なマイノリティ

であった台湾先住民は、日本による植民地支配以前の台湾において、その多くが「文字」を持たない人々であった。そのため、台湾先住民にとって「文字」は、まず「日本語」が、植民地政府による教育によって段階的かつ限定的に普及したといえる。このように「文字」に対する親近感、「文字」を習得するための機会、「文字」を使用して日記をつける行為を習慣として体得する環境などは、被植民者の中でもかなり不均衡に存在したと言ってもよいだろう。

そのような状況に対し、より広汎な層の人々の具体的な経験に焦点をあてる研究動向として、「口述歴史」への取り組みを指摘することができる。³¹⁾このような動きは、「植民地後」に台湾の地で展開した「暴力」の痕跡に、いかに向き合うかという課題を担ったものでもあった。周知のように、アジア・太平洋戦争の終結からまもなくして、東アジアは冷戦構造の中に置かれていく。日本の植民地であった朝鮮および台湾は、日本の支配からの解放後あまり間をおかずに、東アジアにおける冷戦の影響を最も強く受けた地域であったと言ってもよいだろう。そのような国際環境の中で、例えば台湾においては、一九四七年の二二八事件から一九五〇年代の白色テロルへと続く、国民党政府による台湾住民に対する政治

的弾圧事件が起こった。³²⁾そして、その後、長年にわたって、多くの政治受難者および家族は沈黙を強いられてきた。一九八七年の戒厳令解除以降、二二八事件および白色テロルの受難の経験が少しずつ公になって行く状況の中で、その事実の解明と伝承を目的として受難者およびその家族に対する聞き取り調査が展開され、それが「口述歴史」として公刊されるようになるとともに、「口述歴史」を基盤とした歴史研究が進展してきたのが近年の状況であるといえるだろう。³³⁾そして「口述歴史」の対象が、二二八事件および白色テロルの経験のみならず、その前後の状況も含めた個々人のライフストーリー全体におよぶにつれ、それはまさに時間的な意味での植民地期——「植民地後」の時期の経験を問うものであり、思想的な意味でも植民地期の構造的暴力と冷戦期の構造的暴力が、どのように折り重なっていくのかを個々人の経験という地平から問い直すものとなっているといえるだろう。³⁴⁾

このように植民地における「生きられた近代」を具体的な経験の位相から問い直す際、「口述歴史」に基づく研究は、大変重要なものだと思うられる。³⁵⁾そして、だからこそ「口述歴史」が生み出され記録となっていく「場」についての考察、つまり「証言」が語られ、それを「口

述歴史」として定置していく「場」の力学についての考察が、さらに意識的になされていく必要があるといえる。なぜならば「口述歴史」の採集の「場」は、どのような状況であれ、話し手と聞き手による「相互行為・共同作業の場」であるからだ。

このことは当然「口述歴史」全般に及ぶ問題でもあるが、特に植民地経験に関しては、例えば「証言」はどの言語で行われるのか——植民地期に学校教育を通じて学んだ旧宗主国の言葉なのか、それとも現在、彼ら・彼女らが生活する社会における「標準語」なのか、あるいは彼ら・彼女の「母語」なのか——つまり「証言」の「場」で使用される言語によって、想起される記憶領域に差異が生じる可能性があるのではないか、このような問いに自覚的に向き合い、その一つ一つに方法的な意味でも注意を払う必要性を、「口述歴史」に携わる者として自戒を込めて確認しておきたい。

植民地期を経験した人々の高齢化が進む中で、「口述歴史」に基づく研究の必要性和緊急性は増している。さらなる研究の進展を展望して、小稿を終えたい。

注

(1) 近年の日本植民地研究、「帝国史」研究の全般的な

動向については、すでに優れた紹介論文が複数、刊行されている。とりわけ次に掲げる戸邊秀明の一連の論考には、本稿執筆に際して、大きな示唆を得た。戸邊秀明「ポストコロニアリズムのインパクトと可能性——日本植民地研究とのかかわりで——」（日本植民地研究会編『日本植民地研究』第一五号、二〇〇三年）、同「ポストコロニアリズムと帝国史研究」（日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社、二〇〇八年）など。

(2) 当然ながら他の研究動向、個別の研究成果を軽視しているわけではないことも、お断りしておきたい。

(3) 日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』（アテネ社、二〇〇八年）は、日本植民地研究の全般的な研究史の考察を学会全体の取り組みとして行い、注(1)で言及した戸邊秀明的方法論的な論稿をはじめ、「朝鮮」「台湾」「樺太」「南洋群島」「満州」をめぐる研究動向をそれぞれ考察した論稿が一書としてまとめられている。ある種の「共同研究」としての研究史記述の有効性を、同著は示唆していると思われる。

(4) 国民国家論が日本史に与えた影響について、例えば今西一「国民国家論と『日本史』」（『岩波講座 日本歴史』第二二巻、岩波書店、二〇一六年）は、特に西川長夫の思想的営為との関連で詳細に論じている。

(5) 駒込武「『帝国史』研究の射程」(『日本史研究』第

四五二号、二〇〇〇年) 二三四頁。

(6) エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』

(今沢紀子訳、平凡社、一九八六年)。

(7) エドワード・W・サイード『文化と帝国主義 1』

(大橋洋一訳、みすず書房、一九九八年) 一七頁。

(8) このような研究潮流の中で、対象とする「学知」

の種類の多様さと地域の範囲の広さという点で、最も
まとまった研究成果としては、『岩波講座「帝国」日本

の学知』第一〜第八卷(岩波書店、二〇〇六年)を挙
げることができるだろう。人類学という「学知」に関

しては、富山一郎「国民の誕生と「日本人種」(『思
想』第八四五号、一九九四年)をはじめとして、比較

的多くの研究が蓄積されてきた。例えば、科学史の立
場からの論考として、坂野徹『帝国日本と人類学者一

八八四—一九五二年』(勁草書房、二〇〇五年)、同編
著『帝国を調べる—植民地フィールドワークの科学史

—』(勁草書房、二〇一六年)が、人類学の立場からの
「学説史」の批判的な問い直しとして、中生勝美『近代

日本の人類学史—帝国と植民地の記憶—』(風響社、二
〇一六年)が、共同研究の成果として山路勝彦編著

『日本の人類学—植民地主義、異文化研究、学術調査の
歴史—』(関西学院大学出版会、二〇一一年)などがあ

る。

さらに先に言及した『岩波講座「帝国」日本の学知』
においても、十分には包括されていない分野である

「芸術」について、植民地主義との関連を探索した研究
成果が次々と刊行されている状況は、近年の一つの特

徴だといえる。例えば金恵信『韓国近代美術研究—植
民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表

象—』(ブリュッケ、二〇〇五年)、五十殿利治編『帝
国』と美術—一九三〇年代日本の対外美術戦略—』(国

書刊行会、二〇一〇年)、木田拓也『工芸とナショナル
イズムの近代—「日本的なもの」の創出—』(吉川弘文館、

二〇一四年)など。

また本学会の関連でいえば、日本思想史学会二〇〇
九年度大会でのパネルセッションをもとに、「植民地朝

鮮における歴史編纂」を統一テーマとして公刊された
『季刊日本思想史』第七六号(桂島宣弘責任編集、ペリ

かん社、二〇一〇年)は、後に言及する「植民地近代」
論の動向も見据えた上で、植民地支配と「歴史学」の

関連性を論じた刺激的な研究成果だといえる。
(9) 例えば松本武祝「朝鮮における「植民地的近代」
に関する近年の研究動向—論点の整理と再構成の試み

—』(『アジア経済』第四三巻第九号、二〇〇二年)、同
『朝鮮農村の(植民地近代)経験』(社会評論社、二〇

- 五年、特に序章)、並木真人「朝鮮における「植民地近代性」・「植民地公共性」・対日協力―植民地政治史・社会史研究のための予備的考察―」(『国際交流研究』第五号、二〇〇三年)、板垣竜太「〈植民地近代〉をめぐって―朝鮮史研究における現状と課題―」(『歴史評論』第六五四号、二〇〇四年)など。なお「植民地近代」の議論を、植民地期の台湾を念頭において考察した論考として、駒込武「台湾における「植民地的近代」を考える」(『アジア遊学』第四八号、二〇〇三年)がある。
- (10) 前掲『朝鮮農村の〈植民地近代〉経験』一八―一九頁。
- (11) 同前、一九頁。
- (12) ミシエル・フーコー『監獄の誕生―監視と処罰―』(田村俊訳、新潮社、一九七七年)三一頁。
- (13) 尹海東(藤井たけし訳)「植民地認識の「グレイゾーン」―日帝下の「公共性」と規律権力―」(『現代思想』第三〇巻第六号、二〇〇二年)。
- (14) 同前、一三七頁。
- (15) 同前、一三九頁。
- (16) 同前、一四四頁。
- (17) 趙景達「植民地期朝鮮の知識人と民衆―植民地近代性論批判―」(有志舎、二〇〇八年)。

- (18) 同前、九―三二頁。
- (19) 同前。
- (20) 最近、とりわけ二〇一〇年代以降のものとしては、ジェンダーの視点を重視したものとして、伊藤るり他編『モダンガールと植民地的近代―東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー―』(岩波書店、二〇一〇年)、徐智瑛『京城のモダンガール―消費・労働・女性から見た植民地近代―』(姜信子他訳、みすず書房、二〇一六年)などが、メディアに関しては、三澤真美恵『「帝国」と「祖国」のはざま―植民地期台湾映画人の交渉と越境―』(岩波書店、二〇一〇年)などがある。
- また著書『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店、一九九六年)において、「植民地帝国日本」の異民族支配を、台湾・朝鮮・「満洲国」・華北占領地で行った教育・言語政策などの分析を通じて文化統合として論じた駒込武は、近著『世界史のなかの台湾植民地支配―台南長老中学校からの視座―』(岩波書店、二〇一五年)において、林茂生という一人の人物に焦点をあてて、林が台南長老中学校の自主的な運営のために、「折り重なる暴力」と向き合っていく状況をたどることで、「個人史を世界史につなぐこと」(一〇頁)を模索している。このような駒込の試みは、「生きた近代」の実相に分け入り、植民地における「暴力」と

「抵抗」のあり方を考えるうえで、多くの示唆を与えてくれるものだと思う。

なお、植民地期の朝鮮・台湾の「文化」に関する二〇〇〇年代前半の研究動向については、すでに宮本正明「植民地と「文化」」(『年報 日本現代史』第一〇号、二〇〇五年)が、日本・韓国・台湾で刊行された研究成果を網羅的に紹介している。

(21) 前掲「ポストコロニアリズムと帝国史研究」六四頁。

(22) 同前。

(23) 植民地期の朝鮮に関しては、例えば、板垣竜太は著書『朝鮮近代の歴史民族誌―慶北尚州の植民地経験―』(明石書店、二〇〇八年)において、朝鮮の地域社会における植民地経験について「常に他地域の経験との共有可能性を意識しながら」(三六頁)、具体的に記述することを目指し、その一つの方法として、一九三〇年代の朝鮮農村で生活した一人の青年の日記に注目し、そこから消費行動や社会認識を解明するという興味深い試みを展開している(特に第五章「日記を通じてみた植民地経験」)。

(24) 許雪姬「臺灣日記研究」的回顾与展望」(『臺灣史研究』第二二卷第一期、中央研究院臺灣史研究所(台北)、二〇一五年)一五五頁。

(25) 前掲「帝国史」研究の射程」二二四頁。

(26) 前掲「臺灣日記研究」的回顾与展望」一五五頁。なお台湾では、個人の日記の翻刻版が次々に公刊されている。例えば台湾民族運動の指導的立場にあり台湾実業界の重要人物でもあった林獻堂の日記、林獻堂の妻であった楊水心の日記、地域社会の有力者であった張麗俊の日記、台湾農民組合運動の中心的人物であった簡吉の投獄中の日記、文学者であり医師でもあった吳新榮の日記、植民地期に公学校の教師を勤めた黃旺成の日記、植民地期に日本「内地」に留学後、満鉄社員となった楊基振の日記、小説家であり台湾共産党の活動家でもあった呂赫若の日記などが、二〇〇〇年から二〇一五年にかけて刊行された。なおこれらの日記については、中央研究院臺灣史研究所で「臺灣日記知識庫」としてデータベース化が進められており、今後、このデータベースの利用によって、日記に基づいた台湾史研究が急速に進む可能性も高いと思われる。

(27) 近藤正己・北村嘉恵・駒込武編『内海忠司日記 1928-1939―帝国日本の官僚と植民地台湾―』(京都大学学術出版会、二〇一二年)および近藤正己・北村嘉恵編『内海忠司日記 1940-1945―総力戦体制下の台湾と植民地官僚―』(京都大学学術出版会、二〇一四年)。

(28) 二〇一六年八月の段階で既刊のものとしては、尚

友倶楽部他編『田健治郎日記』一～五（芙蓉書房出版、二〇〇八～二〇一五年）。なお同シリーズは、全八巻の刊行が予定されている。

(29) 駒込武「民勅」との相互依存関係―内海忠司と在日日本人―（前掲『内海忠司日記』1928,1939）五二頁。

(30) 西川祐子は著書『日記をつづるといふこと―国民教育装置とその逸脱―』（吉川弘文館、二〇〇九年）の中で、「近代の日記」を「商品化された日記帳の時代の日記」（四六頁）と定義し、一八九五年前後に博文館が日記帳の商品化に本格的に乗り出し、『懐中日記』『当用日記』などの印刷・製本された日記帳が普及していくことによって、「従来の和紙を綴じて墨と毛筆で日記をつづる習慣を大きく変化させてゆく。変化は日記につづられた生活そのものにおよぶ」（九三頁）と指摘している。なお、注(23)で言及した板垣竜太の研究について、板垣が取り上げた朝鮮人青年の日記は、全七冊のうち六冊がライオン歯磨本舗発行の『ライオン当用日記』（定価五〇銭、四六判）に記されていたという（前掲『朝鮮近代の歴史民族誌』三五八頁）。

(31) 例えば、先に言及した台湾先住民に対する、歴史的な観点からの聞き取り調査に基づいた研究成果としては、松田吉郎「阿里山ツォウ族の戦前・戦後―イウスム・ムキナナ氏のライフヒストリーを中心に―」

（『兵庫教育大学研究紀要 第二分冊』第二〇巻、二〇〇〇年）が、植民地期に先住民集落が被った変化の具体像、そして植民地支配の痕跡が戦後の政治弾圧に与えた影響について詳細に論じている。

(32) 何義麟「二・二八事件―「台湾人」形成のエスノポリテイクス―」（東京大学出版会、二〇〇三年）。

(33) 例えば、一九九三年刊行の『非情車站二二八』（自立晩報（台北）、一九九三年）をはじめとして、台湾各地での二二八事件の様相に「口述歴史」から迫ろうとした張炎憲らによる取り組みは、二〇一〇年刊行の『花蓮鳳林二二八』（呉三連台湾史料基金会出版（台北）、二〇一〇年）まで、一連のシリーズとして十冊以上公刊されている。また以前から著名人の「口述歴史」の採集を行ってきた中央研究院近代史研究所は、一九九〇年代中頃より許雪姬らが中心となり、例えば「高雄市二二八相關人物訪問紀錄」（中央研究院近代史研究所（台北）、一九九五年）をはじめ二二八事件に関する「口述歴史」の採集を実施した。さらに一九九〇年代末には、対象が一九五〇年代以降の政治弾圧事件全般にまで広げられた（『戒嚴令期臺北地区政治案件口述歷史』第一輯～第三輯、中央研究院近代史研究所（台北）、一九九九年）。

さらにジェンダーの観点を組み入れた形で、女性

にとつての政治受難の経験を「口述歴史」の採集と
いう形で問う取り組みも進められている。例えば周芬
伶『憤怒の白鴿―走過臺灣百年歴史的女性―』（元尊文
化出版（台北）、一九九八年。なお同著は、藤目ゆき監
修・馮守娥監訳により『憤れる白い鳩 二〇世紀台湾を
生きて』と題して、二〇〇八年に明石書店より日本語
版が刊行されている）。また最近の成果としては『獄外
之囚・白色恐怖受難者女性家屬訪問紀録 全三卷』（国
家人権博物館籌備処（新北）・中央研究院臺灣史研究所、
二〇一四―二〇一五年）が、許雪姬らを中心にまとめ
られている。

(34) 例えば、一九九〇年代後半に中央研究院臺灣史研
究所籌備処（設立事務所）では、アジア太平洋戦争期
に日本軍に動員された台湾人兵士の「口述歴史」の採
集が、周婉窈らによって進められた（『臺籍日本兵座
談会記録并相關資料』中央研究院臺灣史研究所籌備処、
一九九七年。および『走過兩個時代的人―臺籍日本兵
―』中央研究院臺灣史研究所籌備処、一九九七年）。こ
れらの研究を踏まえて周婉窈は、台湾人の日本軍兵士
が戦後の台湾社会で周縁化されていった状況について、
台湾社会内部の世代間の歴史認識のズレの大きさを熟
知した上で、若い世代に語りかける形で次のように表
現している。「台湾人日本兵が経験した境遇はそれぞれ

異なっていたが、よく生きながらえて帰郷できた人も、
また共通する運命を甘受せざるを得なかった――日本
のために戦ったという気まずい過去と口にできない満
腔の苦しみを抱えながら、新しい社会の中で沈黙を強
いられて生きるようになったのである。歴史は彼らを
嘲笑うかのようにであった。想像してみてほしい。あな
たは歳若い身で国家のために出征し、戦場で勇敢に奮
戦し、目の前で同胞が一人一人と死んでいく。ところ
がある日突然戦争が終わり、するとあなたはたちまち
国籍を失い、次の日からはまったく別の国の国民とし
て生まれ変わる。しかもその新しい国家というのが、
今まであなたが命がけて戦ってきた敵国「中国」なの
だ。そんな目にあえば、歴史があなたを笑い者にして
いるのではないかと思わずにいられないだろう」（周婉
窈『図説台湾の歴史』濱島敦俊他訳、平凡社、二〇〇
七年、一五四―一五六頁）。

(35) 「口述歴史」に基づく研究のテーマは、今後さらに
広がっていくと思われる。例えば、植民地期を経験し
た台湾人から聞き取り調査を長年にわたって続けてい

る所澤潤は、主に教育史の観点から、被植民者の学校教育の経験の具体像に迫っている（具体的な成果としては、例えば所澤潤他著「聴取り調査・外地の進学校験」(2)～(9)、『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第四四～四九号、第五二号、第五三号、一九九五～二〇〇四年）。

(36) 杉原達『中国人強制連行』（岩波書店、二〇〇二年）一九四頁。

(37) この点については、以前にも問題意識の概観を指摘したことがある（松田京子「一九三〇年代の台湾原住民をめぐる統治実践と表象戦略―「原始芸術」という言説の展開―」、『日本史研究』第五一〇号、二〇〇五年、および同『帝国の思考―日本「帝国」と台湾原住民―』有志舎、二〇一四年）。指摘の文脈については、右に掲げた拙稿・拙著を参照いただければ幸甚である。

付記 本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究(C)「課題番号：25370802」による研究成果の一部である。

（南山大学教授）